

長野県松本市

AGATAMACHI

# 県町遺跡Ⅺ

—緊急発掘調査報告書—

1997.3

松本市教育委員会

長野県松本市

AGATAMACHI

# 県町遺跡 XI

—緊急発掘調査報告書—

1997.3

松本市教育委員会



陶碗（風字碗：第96号住居址）

表

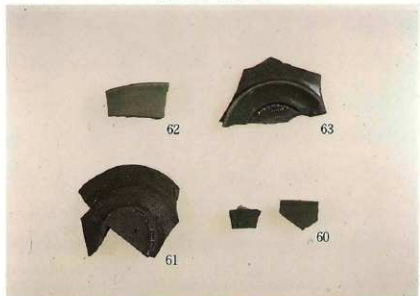


裏



金属器86

隆平永宝（検出面）



緑釉陶器（第96号住居址）



転用硯出土状況（第96号住居址：30）



墨書土器底部（第97号住居址）



県町遺跡Ⅺ次調査地全景（南西から）

## 序

---

松本市街地を東西に流れる薄川の周辺には多くの埋蔵文化財があります。このうち薄川の右岸に位置する県町遺跡は弥生時代から平安時代の集落跡として知られています。このたび公務員官舎が建設されることとなり、文化財の保護を図るために松本市が大蔵省関東財務局から委託を受け、松本市教育委員会が県町遺跡の第11次調査として緊急発掘調査を実施したものです。

発掘調査は松本市教育委員会の委託を受けた（財）松本市教育文化振興財団によって組織された調査団により、平成8年4月22日から同年5月14日にかけて行なわれました。その結果、奈良・平安時代の竪穴住居址4棟のほか、同時代の貴重な遺物も多数得ることができました。これらは今後地域の歴史解明に大変役立つ資料になると思います。

しかしながら開発事業に先立って行なわれる発掘調査には、記録保存という遺跡の破壊を前提とする側面があることも事実であります。私たちの生活が豊かになるための開発とそれによって失われる歴史遺産という矛盾のなかで、文化財保護に携わるものの苦悩は絶えません。本書を通して貴重な文化財の保護とその施策へのご理解を深めていただければ、この上なく幸いに存じます。

最後になりましたが、過酷な状況のなかで発掘調査にご協力いただいた参加者の皆様、また調査の実施に際して、多大なご理解とご協力をいただいた大蔵省関東財務局、農林水産省蚕糸昆虫農業技術研究所松本支所の関係者の方々、地元関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

平成9年3月

松本市教育委員会 教育長 守屋立秋

# 例言

1. 本書は、平成8年4月22日～5月14日にわたり実施された松本市東1丁目、2丁目、3丁目に所在する県町遺跡の緊急発掘調査報告書である。

2. 本調査は公務員宿舍建設に伴う緊急発掘調査であり、大蔵省関東財務局より松本市が委託を受け、松本市から再委託を受けた㈱松本市教育文化振興財団・考古博物館が実施、本書の作成も行なった。なお、業務委託及び再委託にかかる事務処理については松本市教育委員会が行なった。

3. 本書の執筆は次の通りである。

I：事務局、Ⅲ-3(5)：太田圭部、その他の執筆および編集作業を荒木龍（考古博物館）が行なった。

4. 本書作成にあたっての作業分担は以下の通りである。

遺物洗浄 竹平悦子、林和子、洞沢文江、百瀬二三子

遺物保存処理・復原 五十嵐周子、内澤紀代子、内田和子、村松恵美子

遺物実測 荒木龍、太田圭部、竹内靖長、竹平悦子、洞沢文江、MIN AUNG THWE、松村恵美子

遺構図整理 石合英子

トレース 太田圭部、開嶋八重子、竹平悦子、洞沢文江、MIN AUNG THWE、村松恵美子

組版 石合英子、洞沢文江

写真撮影 荒木龍、竹内靖長（遺構）、宮島洋一（遺物）

5. 本書で使用した遺構名の省略語は次の通りである。

竪穴住居址→住、建物址→建、土坑→土、ピット→P

6. 遺構図中の土層名は記号化している。各記号の説明は以下の通りである。

表記法 土色（混入物・量） 混入物量 a 少量 b 中量 c 多量

## 土 色

1 褐色	7 茶褐色	13 赤灰色	19 黒色
2 暗褐色	8 灰褐色	14 黄灰色	20 焼土
3 黒褐色	9 橙褐色	15 青灰色	21 砂
4 明褐色	10 灰色	16 黄色	22 砂礫
5 赤褐色	11 暗灰色	17 暗黄褐色	23 緑灰色
6 黄褐色	12 黒灰色	18 暗茶褐色	

## 混入物

A 小礫	H 黄色土粒	O 茶褐色土塊	V 灰色土塊
B 礫	I 黄褐色土粒	P 砂粒	W 赤褐色土粒
C 焼土粒	J 橙褐色土粒	Q 黒色土粒	X 赤褐色土塊
D 焼土塊	K 茶褐色土粒	R 黒色土塊	Y 鉄分
E 炭化物粒	L 黄色土粒	S 暗褐色土粒	
F 炭化塊	M 黄褐色土塊	T 暗褐色土塊	
G 炭化材	N 橙褐色土塊	U 灰色土粒	

7. 図中に使用したスクリーントーンの実現内容は以下の通りである。

遺構図：網目-焼土 砂目-炭片の散布範囲

遺物図：網目－黒色処理 赤色の細かい網目－朱墨の付着 細かい網目－黒の付着

8. 土器については観察表を省略したので、時期決定上の根拠となる調整技法などのうち、必要なものについては図中、あるいは図の番号に添えてメモを付した。以下に一例を示す。

回転ヘラ削り — — — 線で表わし、稜線、ロクロ目と区別した。

底部切り離し 須恵器杯A（無台）はヘラ切り痕の確認されるもののみ底部に「ヘラ」を記した。記載のないものは回転糸切りか、あるいは不明のものである。

灰釉陶器、緑釉陶器は回転糸切り痕の確認されるもののみ底部に「糸」を記した。表示のないものは回転ヘラ削りが底面まで及んでいるものか、あるいは不明のものである。

土器・陶器の種別 土師器は断面白抜き、須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器は断面塗りつぶしとし、また灰釉陶器、緑釉陶器については遺物番号の横に種別を併記した（灰釉陶器：K、緑釉陶器：R）。

また、土師器のうち黒色土器については先に示したように網目トーンで表現している。

9. 本文中で用いている奈良・平安時代の時期区分や土器の分類・用語は岐阜県埋蔵文化財センターによる中央自動車道長野線関係調査遺跡の成果に拠っている。それらも含め、総体の遺構・遺物に係わる評価については以下の文献を参考にしている。本書では以後「文献1」・「文献2」と呼ぶ。

岐阜県埋蔵文化財センター 1990 『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4 松本市内その1』総論編－文献1

岐阜県埋蔵文化財センター 1989 『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書3 塩尻市内その2』吉田川西遺跡－文献2

10. 松本市教育委員会では県町遺跡に関して以下の発掘調査報告書を刊行している。本書では以後これらを「文献3」・「文献4」と呼ぶ。

松本市教育委員会 1981 『松本市文化財調査報告No19 あがた遺跡』－文献3

松本市教育委員会 1990 『松本市文化財調査報告No82 県町遺跡』－文献4

11. 本調査で得られた出土遺物および調査の記録類は松本市教育委員会が保管・管理し、松本市立考古博物館（〒390 長野県松本市中山3738-1 TEL 0263-86-4710 FAX 0263-86-9189）に収蔵されている。

# 目次

巻頭図版

序

例言

目次

## I. 調査の経緯

1. 調査の経緯 ..... 1
2. 調査体制 ..... 1

## II. 遺跡の位置と環境

1. 地理的環境 ..... 3
2. 歴史的環境 ..... 5
3. 果町遺跡の過去の調査 ..... 7

## III. 調査結果

1. 調査の概要 ..... 8
2. 遺構
  - (1) 竪穴住居址 ..... 11
  - (2) 建物址 ..... 12
  - (3) 土坑 ..... 12
3. 遺物
  - (1) 土器・陶器 ..... 16
  - (2) 金属器 ..... 17
  - (3) 鍛冶関係資料 ..... 18
  - (4) 文字関係資料 ..... 18
  - (5) その他 ..... 18

## IV. 調査のまとめ ..... 26

図版



# 1. 調査の経緯

## 1. 調査の経緯

県町遺跡は松本市県1丁目、県2丁目、県3丁目にわたって広がる弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代の集落遺跡である。平成7年、県町遺跡の範囲内にある農林水産省蚕糸昆虫農業技術研究所松本支所敷地において大蔵省関東財務局による公務員官舎建設が計画された。松本市教育委員会が建設予定地の試掘調査を実施したところ、奈良・平安時代の遺構と遺物が確認され、建設工事によって破壊される恐れがあることが判明した。これをうけて大蔵省関東財務局、長野県教育委員会、松本市教育委員会の3者が遺跡保護について協議を行なった結果、事前に緊急発掘調査を実施、記録保存を図ることになった。

関東財務局より委託を受けた松本市は財団法人松本市教育文化振興財団に本調査を委託し、財団では考古博物館が現地の調査、遺物整理、報告書作成にあたることとなった。この間の調査届け出、委託・再委託にかかる事務処理については松本市教育委員会が行なった。

## 2. 調査体制

**調査団長** 守屋立秋（松本市教育長）

**調査担当者** 竹内靖長、荒木 龍

**調査員** 太田圭郁、松尾明恵、三村 肇

**協力者** 赤羽包子、飯田三男、五十嵐周子、石合英子、入山正男、内田和子、内澤紀代子、開嶋八重子、奥 喜義、小林 隆、斎藤政雄、坂口ふみ代、竹平悦子、内藤かおり、林 和子、布山 洋、布野行雄、洞沢文江、道浦久美子、三宅康司、MIN AUNG THWE、村松恵美子、百瀬二子、吉田 勝

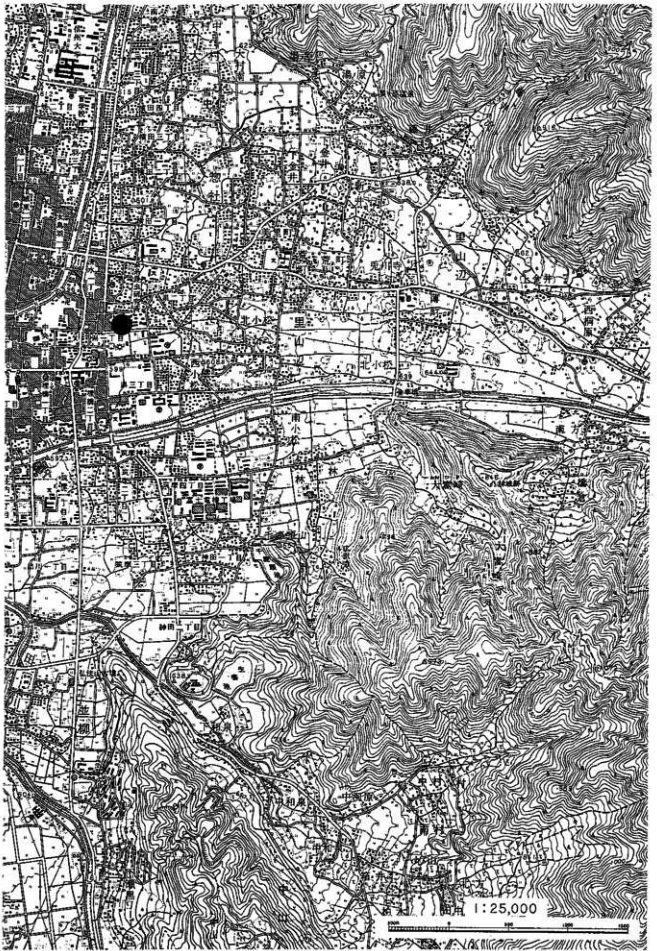
### 事務局

松本市教育委員会 岩淵世紀（文化課長）、熊谷康治（文化財係長）、田多井用章（事務員）

### 財団法人松本市教育文化振興財団

事務局：大池 光（事務局長）、手塚英男（局次長）、川窪 茂（次長補佐）

考古博物館：村田正幸（館長）、松澤憲一（主査～H8.9）、近藤 潔（主事）、川上真澄



第1図 調査地の位置

## II. 遺跡の位置と環境

### 1. 地理的環境

#### (1) 位置と地形

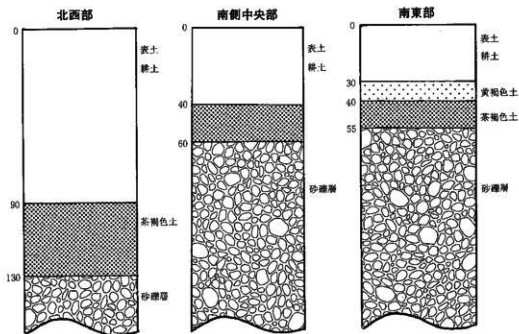
県町遺跡は松本市県1丁目、2丁目、3丁目に所在しており、松本市街地の東側に位置している。現在はあがたの森公園や蚕糸記念公園などの公園と4つの高等学校と1つの小学校のある文教地区になっており、周辺には閑静な住宅地が広がっている。

本遺跡の南側約500mには薄川が西に向かって流れている。薄川は入山辺地区を扇頂として西側に広がる扇状地を形成しており、扇端は松本市街地にあり、南側は神田付近まで広がり、北側は北から南に広がる女鳥羽川扇状地と交差している。本遺跡は薄川右岸の扇状地上の標高約599mに位置し、北西方向に緩やかに傾斜している。

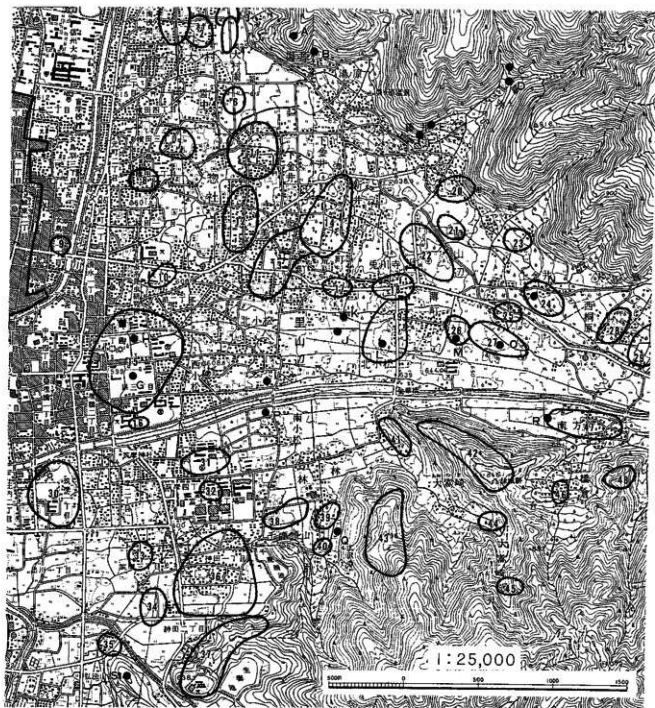
#### (2) 遺跡の土層

本遺跡は薄川右岸の扇状地上に位置している。薄川は出水率と河況係数が非常に大きい河川である。頻繁な氾濫により大量の土砂が堆積している。過去の調査でも度々洪水を示す痕跡がみられている。また当地域は近代以降、耕地、住宅地等に活発に利用されており、これらの攪乱もみられる。本遺跡内では概ねこの2つに由来する土層がみられる。

今回の調査地内3箇所(北西部、南側中央部、南東部)の土層柱状図を下に示した(第2図)。当調査地の土層も上記の2つの要因がみられる。桑畑の耕作土層と近代の建築物の攪乱土層が上層を占める。その下に茶褐色土層、砂礫層と続く。遺物包含層は茶褐色土層中にあり、遺構検出面も茶褐色土層中にあった。本遺跡の南側の調査地でみられた弥生時代、古墳時代の遺物包含層はみられず、奈良・平安時代の包含層のみが存在していた。最下層は砂礫層であり、調査地全体に広がる。過去の一時期においてこの場所が河道になったのだろう。



第2図 調査地の土層



■ 今回の調査地 ● 古墳  
遺跡

- |               |          |           |            |              |
|---------------|----------|-----------|------------|--------------|
| 1. 大輔原        | 11. 惣社   | 21. 藤井    | 31. 北川原    | 41. 林山原      |
| 2. 大村立石       | 12. 宮北   | 22. 堀の内   | 32. 南川原    | 42. 林城址 (大城) |
| 3. 大村古屋敷      | 13. 下原   | 23. 上金井矢崎 | 33. 三才     | 43. 林城址 (小城) |
| 4. 大村前田       | 14. 新井   | 24. 上金井   | 34. 神田西    | 44. 大高崎      |
| 5. 松本城址 (町屋敷) | 15. 栗町   | 25. 鎌田    | 35. 平畑     | 45. わび沢      |
| 6. 塚田         | 16. 堀橋   | 26. 薄町    | 36. 神田     | 46. 橋倉       |
| 7. 横田         | 17. 荒町   | 27. 石上    | 37. 栢護山古墳群 | 47. 南方       |
| 8. 横田古屋敷      | 18. 兔川寺  | 28. 西側原   | 38. 千鹿頭北   | 48. 水番所址     |
| 9. 女鳥羽川       | 19. 針塚   | 29. 東側原   | 39. 御符     |              |
| 10. 四ッ谷       | 20. 藤井山田 | 30. 筑摩    | 40. 林      |              |
| <b>古墳</b>     |          |           |            |              |
| A. 御母家1号      | D. 丸山    | G. 果塚1号   | J. 大塚1号    | M. 古宮        |
| B. 御母家2号      | E. 藤井1号  | H. 果塚2号   | K. 大塚2号    | N. 上金井       |
| C. 山田入        | F. 藤井2号  | I. 北河原屋敷  | L. 針塚      | O. 石上        |
|               |          |           |            | P. 巾上        |
|               |          |           |            | Q. 御符        |
|               |          |           |            | R. 南方        |
|               |          |           |            | S. 弘法山       |

第3図 周辺遺跡

## 2. 歴史的環境

泉町遺跡は薄川扇状地の扇端部に位置する。この薄川段丘及び薄川扇状地上には縄紋時代から近世の遺跡が数多く分布している。近年の発掘調査により次第にその様相が明らかになりつつある。本節では発掘調査の実施された遺跡を中心に泉町遺跡の周辺遺跡を時代毎に概観する。

**旧石器時代：**該期の遺物及び遺構はみられない。

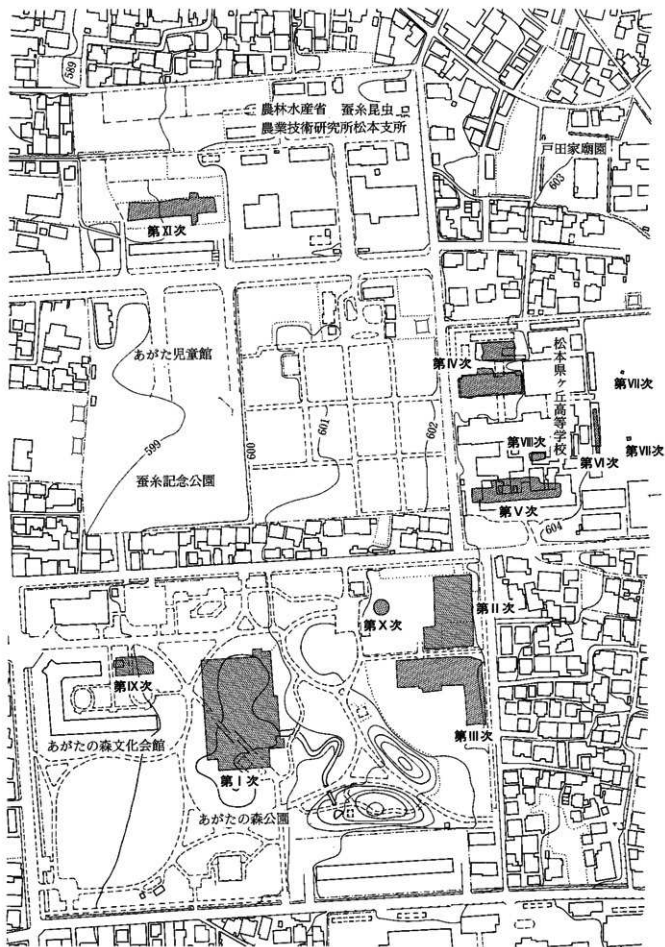
**縄紋時代：**薄川兩岸の山麓斜面及び扇状地扇央・扇頂部に分布している。薄川上流の大和合に中期遺跡がみられる。薄川右岸に石上遺跡（前期末～中期初頭）、鎌田遺跡（前期末～中期初頭）、堀の内遺跡（中期初頭）等がみられる。左岸には南方遺跡（早期～晩期）、林山腰遺跡（中期初頭～中葉・後期）、千鹿頭北遺跡（中期）がみられる。このうち右岸では石上遺跡3軒、鎌田遺跡1軒、堀の内遺跡6軒、左岸では林山腰遺跡4軒の住居址が検出されている。

**弥生時代：**薄川中・下流域の河岸段丘、扇端部に分布している。右岸に針塚遺跡（前期末）、泉町遺跡（中期後半、後期末）、鎌田遺跡（後期後半）、堀の内遺跡（後期）、本屋敷遺跡（中期）、宮北遺跡（後期）左岸に千鹿頭北遺跡（中期・後期）、神田遺跡（中期）がみられる。鎌田遺跡で2軒、堀の内遺跡で10軒の住居址が検出されている。泉町遺跡では住居址が42軒（中期後半38・後期末4）検出され、当地域を代表する集落遺跡である。また、針塚遺跡では当地域に弥生文化が波及した頃の再葬墓（前期末）が検出されている。

**古墳時代：**薄川中・下流域の河岸段丘と扇状部に集落遺跡、扇状部・山麓部に古墳が分布する。集落遺跡は右岸に泉町遺跡（中期末～後期初頭）、堀の内遺跡（前期・中期・後期）、鎌田遺跡（中期）、下原遺跡（後期末）等がある。左岸には千鹿頭北遺跡（前期・後期）がある。泉町遺跡4軒、堀の内遺跡25軒、鎌田遺跡9軒、下原遺跡11軒、千鹿頭北遺跡47軒の住居址が検出されている。古墳は右岸の扇状部に針塚古墳（5世紀後半）、大塚古墳（後期）、古宮古墳（後期）等の積石塚古墳群、山麓部に丸山古墳（6世紀）がある。その他、堀の内遺跡では前期の方形周溝墓1基、石上遺跡では後期古墳の周溝が検出されている。左岸では南方古墳（後期）、巾上古墳（後期）、山麓部に御符古墳がある。針塚古墳（H1、2、5年度調査）では竪穴式石槨内に内行花文鏡（船載鏡）が、南方古墳（S63年度調査）からは金銅装の圭頭太刀、銅銚、承盤、鉄製盃蓋等の副葬品が出土しており注目される。

**奈良・平安時代：**薄川中・下流域の河岸段丘上、扇状部に広く分布する。右岸に堀の内遺跡、薄町遺跡、石上遺跡、泉町遺跡、下原遺跡、針塚遺跡がある。左岸には千鹿頭北遺跡、林山腰遺跡、神田遺跡がある。堀の内遺跡で67軒、薄町遺跡10軒、石上遺跡33軒、泉町遺跡46軒、下原遺跡10軒、針塚遺跡19軒、千鹿頭北17軒、林山腰遺跡2軒の住居址が検出されている。このうち泉町遺跡は緑釉陶器、陶硯などが検出されており、当地域の中核的集落である。

**中世・近世：**堀の内遺跡、石上遺跡、南方遺跡、薄町遺跡、下原遺跡がある。堀の内遺跡で火葬墓2基、石上遺跡で火葬墓3基、南方遺跡で12～13世紀の住居址5軒、薄町遺跡で建物址1棟、下原遺跡で土坑墓5基などがみられるほか大塚古墳で遺物を得ているが、調査例が少なく該期の様相はよくわかっていない。



第4図 第XI次までの調査地 (1:2,500)

### 3. 県町遺跡の過去の調査

県町遺跡は松本県ヶ丘高等学校、農林水産省蚕糸昆虫農薬研究所松本文支所、蚕糸記念公園、あがたの森公園一帯に広がる遺跡である。本遺跡では松本市教育委員会が実施する発掘調査以前から多くの遺物出土例があり、幾度かの調査もおこなわれている。遺物出土例は大正8年の旧制松本高等学校建設（現・あがたの森公園）の緑釉陶器等の出土まで遡る。その後も土師器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器等が数多く出土しており、数々の文献で紹介されている。（文献4の本文編第2章3節を参照のこと）

松本市教育委員会では今回の調査までに1980年（昭和55年）から1995年（平成7年）にかけて計10回の発掘調査を実施してきた（前ページに各調査地点の位置を示した）。調査はあがたの森公園と松本県ヶ丘高等学校を中心に約9000㎡が対象となり、弥生時代から古墳時代、奈良・平安時代各期の遺構及び遺物が出土している。調査の成果は当地域の各時代の様相を解明するのに重要な役割を果たしてきた。

以下の表では第X次調査までの概要を示した。なお、これらの調査の詳細は既出の報告書を参照されたい。（第IX次調査と第X次調査は未報告）

第1表 県町遺跡の過去の調査

調査次・調査年	調査面積	調査原因	検出遺構	出土遺物
第I次 1980 (S. 55)	4000㎡ (注)	あがたの森公園造成	竪穴住居址3(弥生2、平安1) 礎敷遺構 1	弥生時代：土器、石器 平安時代：土師器、須恵器、灰釉陶器
第II次 1984 (S. 59)	1338㎡	あがたの森公園 駐車場建設	竪穴住居址17(弥生) 土坑 11(弥生8古墳1不明2)	弥生時代：土器、石器、石製品、骨器
第III次 1985 (S. 60)	1372㎡	あがたの森公園造成	竪穴住居址24(弥生23、平安1) 土坑 44(弥生26、不明3)	弥生時代：土器、石器、石製品
第IV次 1986 (S. 61)	853㎡	松本県ヶ丘高等学校内 特別教室建設	竪穴住居址13(平安) 土坑 4(奈良3、平安1) 溝 4(平安2、中世以降2) 集石 3(平安1、平安以降2)	奈良平安：土師器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、青磁、白磁、石器、石製品、土製品、鉄器
第V次 1987 (S. 62)	696㎡	松本県ヶ丘高等学校内 本館建設	竪穴住居址27(弥生2古墳4 平安21) 土坑 4(奈良2平安2) 溝 2(弥生) ピット群 1	弥生時代：土器、石器、石製品 古墳時代：土師器、須恵器 奈良平安：土師器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、石製品、鉄器
第VI次 1988 (S. 63)	84㎡	松本県ヶ丘高等学校内 部室棟建設	竪穴住居址2(平安) 土坑 2(平安)	平安時代：土師器
第VII次 1986 (S. 61)	6㎡	松本県ヶ丘高等学校内 U字溝建設 (立ち会い調査)	竪穴住居址2(平安)	平安時代：土師器、須恵器
第VIII次 1989 (H. 1)	48㎡	松本県ヶ丘高等学校内 倉庫建設	竪穴住居址2(平安) 土坑 1(平安)	平安時代：土師器、須恵器、灰釉陶器、石器
第IX次 1991 (H. 3)	330㎡	旧制松本高等学校 記念館建設	建物址 1(平安) 集石 3	平安時代：土師器、須恵器
第X次 1995 (H. 7)	40㎡	あがたの森公園内 貯水槽設置	土坑 5(弥生) ピット 7(弥生) 溝 2(弥生)	弥生時代：土器 奈良平安：須恵器

注：グリット方式の調査なので実際の調査面積は狭い。

## III. 調査結果

### 1. 調査の概要

今回の調査地は松本市県1丁目9番地1号の農林水産省蚕糸昆虫農業技術研究所松本支所敷地内に所在する。調査時点での地目は桑畑である。平成7年度の試掘調査で奈良・平安時代の遺構と遺物を確認し、建築物の基礎工事で破壊される恐れのある箇所を対象に調査を実施した。

調査地は県町遺跡の北側部分に位置している。調査地のほとんどの部分は東西方向に流れる自然流路址と近代以降の攪乱で占められていたが、北西部に奈良・平安時代の竪穴住居址4軒、南東部に近代の建物址1棟が検出された。

遺物は奈良・平安時代の遺物をを中心にテンバコ4箱分出土した。このうち検出面南西部より平安時代の銭貨・皇朝十二銭の一つ隆平永宝1点、96住より松本市及び周辺市町村では3例目の陶硯（風字硯）1点、黒色土器A・灰釉陶器を硯として使用した転用硯2点、緑釉陶器片4点、97住より「池」と書かれた墨書土器1点等の特殊品がみられる。また95住では多数の金属製品（82点）と大量の鉄鋳滓（4694g）、土製の鞠の羽口が検出されたが、鉄鋳滓は過去の調査の合計の出土量の約6割にあたる。

遺構の測量は調査地内に任意点を設定し、真北を基準に3mグリットを設置して行なった。遺構番号に関しては竪穴住居址、建物址が第1次調査からの連番（95住、建2から。但し90～94住は欠番）、土坑は1101から順次、番号を付けた。検出遺構及び出土遺物の詳細は次節以降にゆずり、以下、今次の調査面積と概略を列記する。

調査面積：662.4㎡

検出遺構：竪穴住居址 4軒（奈良・平安時代）

建物址 1棟（近代）

土坑 4基（奈良・平安時代）

出土遺物：弥生時代 土器

奈良・平安時代 土器・陶器（土師器、黒色土器A、黒色土器B、軟質須恵器、須恵器、灰釉陶器、  
緑釉陶器）

金属器（釘、刀子、鉄鍬、楔、不明品、銭貨、鉄鋳滓）

石器（凹石）

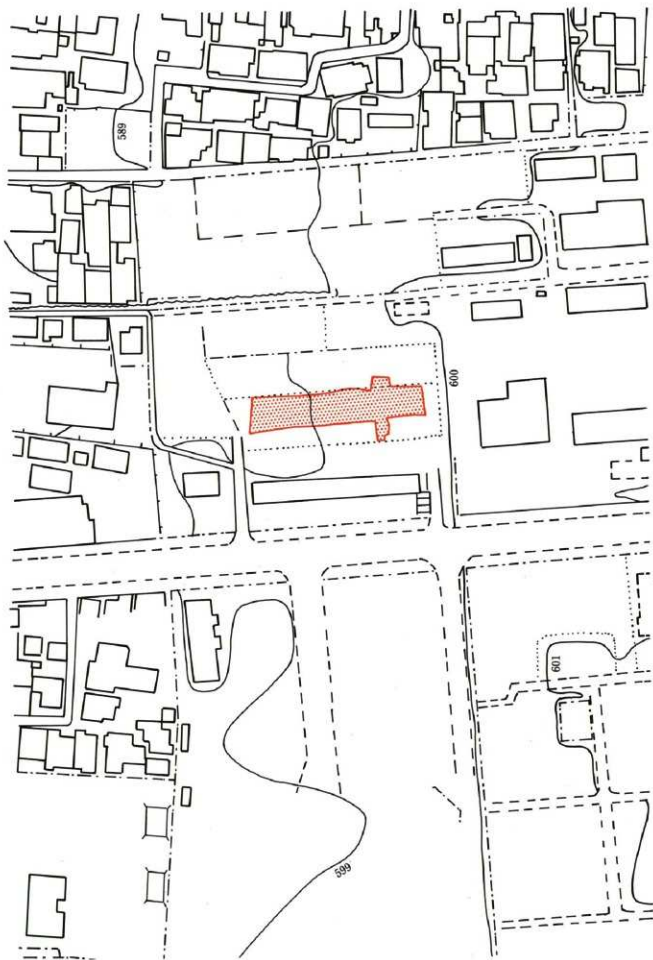
土製品（鞠の羽口）

その他（風字硯、転用硯）

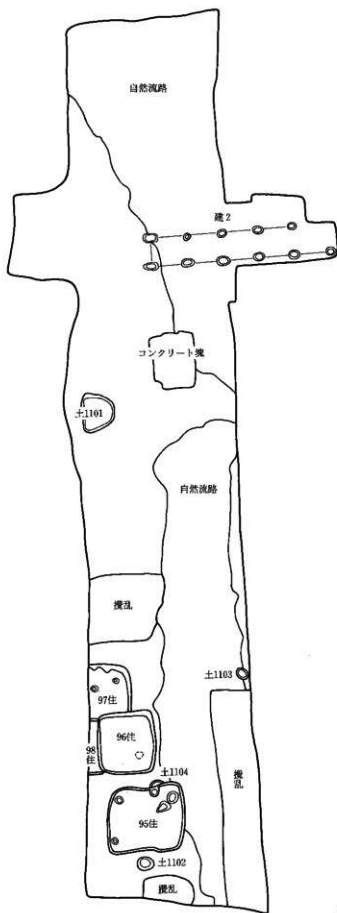
江戸時代 金属器（銭貨）

近・現代 陶磁器





第5図 調査地の位置 (1 : 1,250)



第 6 図 第XI次調査全体図

## 2. 遺構

### (1) 竪穴住居址

#### 第95号住居址 (第7図、図版2)

調査地北西部に位置する。土坑1104を切っている。平面形は隅丸方形。

カマド：住居東壁中央部に位置する。石組。住居廃棄時に破棄されたようである。両軸石がひとつずつ残存しているのみであり、焼土と被熱面はみられなかった。火床部に浅い掘り込みがある。完形の土師器杯A(5)が伏せた状態で検出された。

床：中央部に残存している。貼床であるが堅緻でない。

壁：緩やかに立ち上がる。壁高は約20cm。

ピット：5基検出された。そのうちP<sub>1</sub>、P<sub>2</sub>、P<sub>3</sub>は位置から支柱穴と考えられる。P<sub>2</sub>には柱痕が残存する。P<sub>3</sub>はカマドの南脇に位置する。

覆土：2層に分かれる。II層は壁際に堆積しており、I層は残った空間に逆三角形に堆積していた。II層は炭化物塊を多量に含む黒褐色土。I層は暗褐色土。双方とも拳大から人頭大の礫が多量にみられた。

遺物の内容及び遺物出土状況：I層・II層中にわたってみられた。土師器杯・碗・鉢・羽釜、黒色土器A杯・碗、灰釉陶器の碗・皿・瓶類もしくは壺類がみられる。82点の金属器と158点（総重量：4694g）の鉄鉾滓が出土している。これは県町遺跡での単一遺構からの最多出土量である。また、籾の羽口、石器(凹石)なども検出された。

時期：口径12cm前後、器高3.2cm前後の土師器杯Aが食器の主体を占める。また灰釉陶器は光ヶ丘1号窯式と大原2号窯式が混在する。以上より本住居址は古代9期に位置するとおもわれる。

#### 第96号住居址 (第7図、図版3)

調査地北西部に位置する。第97号住居址、第98号住居址を切っている。平面形は隅丸方形。最初は検出では捉えられず、遺物と炭化物の散布する範囲を目安にプランを確定した。

カマド：みられない。

床：貼床らしいものはみられず、地山面を床面とした。

壁：緩やかに立ち上がる。壁高約24cm。

ピット：みられない。

覆土：3層に分かれる。I層は炭化物を多量に含む暗褐色土、II層は灰色土、III層は小礫を多量に含む暗褐色土である。I層とII層には拳大から人頭大の礫が多量にみられる。III層が壁際に堆積し、次いでII層がレンズ状に堆積している。最後にI層が残りの空間を占める。

遺物の内容及び遺物出土状況：主にII層の灰色土中から検出された。土師器、黒色土器A杯・碗・皿・鉢、黒色土器B皿、須恵器鉢・壺類もしくは甕類、軟質須恵器杯、灰釉陶器碗・皿・瓶類もしくは壺類、緑釉陶器杯・碗が検出された他、陶硯や転用硯、墨書土器などの文字関係資料が検出された。また、金属器、鉄鉾滓、籾の羽口などもみられた。

時期：黒色土器A杯Aが食器の主体を占め、同時に軟質須恵器、灰釉陶器、黒色土器B皿Bがみられる。以上から本住居址は古代7～8期に位置するとおもわれる。

#### 第97号住居址 (第7図、図版4)

調査地北西部に位置する。西側を第96号、第98号住居址に切られている。北側は調査地外。当初のプランを南側に拡張した。隅丸方形。

カマド：住居東壁中央部。被熱面がみられる。袖石、支柱石等は検出されなかったが、右側の袖部に土師器片がみられた。構築材とおもわれる。

床：地山面を床面とした。

壁：緩やかに立ち上がる。壁高約25cm。

ピット：2基検出された。P<sub>2</sub>は支柱穴とおもわれる。

覆土：2層に分れる。I層は小礫を多量に含む暗褐色土。II層は黒褐色土。

遺物の内容及び遺物出土状況：土師器小型甕・長胴甕・甕、須恵器杯・壺・甕、黒色土器A杯が検出された。この中には墨書土器（76）が1点みられる。I層にやや多くII層では少ない。

時期：回転糸切り調整の須恵器杯Aが食器の主体を占めるが、回転ヘラ切りも僅かにみられる。また須恵器盤がみられる。以上から本住居址は古代4期に位置するとおもわれる。

#### 第98号住居址（第7図）

調査地北西部に位置する。南側を第96号住居址に切られ、東側で第97号住居址を切っている。北側は調査地外。平面形は不明。東西に僅かに壁が残っていた。

カマド：検出されず。

床：地山面を床面とした。

壁：直に立ち上がる。壁高約20cm。

ピット：検出されず。

覆土：3層に分かれる。I層は少量の炭粒、小礫を混入する暗褐色土。II層は少量の小礫が混入する暗褐色土。

遺物の内容及び遺物出土状況：少量の土師器片、黒色土器片が検出されたが器種は不明。

時期：不明

## (2) 建物址

#### 第2号建物址（第8図、図版5）

調査地東南部に位置する。平面形は長方形を呈する。柱配りは側柱式。規模は5間×1間。桁行180～190cm、梁行240cm。11個の礎石を持つ。遺物はみられなかった。

時期：この遺構は当地の数十年前の地図によると、調査地が桑畑になる以前にあった蚕糸研究所に付属する建築物の基礎部分である。

## (3) 土坑

土坑4基が検出された。

#### 第1101号土坑（第8図、図版5）

調査地中央部北側に位置する。平面形は台形。

覆土：暗褐色土単層。炭と焼土粒を多量に含む。底部に粒径10～20cm程度の礫がみられる。

遺物の内容及び遺物出土状況：土師器杯、黒色土器A杯、須恵器杯・壺、灰釉陶器等がみられた。

時期：土師器杯、灰釉陶器は混入品と考える。底部がすべて回転糸切り調整の須恵器杯が食器の主体であり、僅かに黒色土器A杯がみられる。以上から本土坑は古代5～6期に位置するとおもわれる。

#### 第1102号土坑（第8図）

調査地北西部の95住の西側に位置する。平面形は円形。

少量の須恵器、土師器が検出されたが器種は不明である。

時期：不明

第1103号土坑（第8図）

調査地南西部に位置する。平面形は楕円形。遺物はみられない。

第1104号土坑（第8図）

調査地北西部に位置する。95住に切られる。平面形は不明。遺物はみられない。

第2表 竪穴住居址一覧表

住居 No.	図 No.	平面形	規模		主軸方向	カマド形態 種類・位置	備考
			長軸×短軸×深さ(cm)	床面積(m <sup>2</sup> )			
95	7	隅丸方形	508×436×20	19.1	N-85°-E	石組・東壁中央	土1104を切る。 時期：古代9期。
96	7	隅丸方形	416×384×24	12.6	N-2°-W	ナシ	97・98住を切る。 時期：古代7～8期。
97	7	隅丸方形	(364)×(292)×26	(7.9)	N-86°-E	不明・東壁中央	96・98住に切られる。 区域外にかかる。 時期：古代4期。
98	7	不明	372×(108)×22	(2.2)	不明	ナシ	97住を切り、98住に切られる。 区域外にかかる。 時期不明。

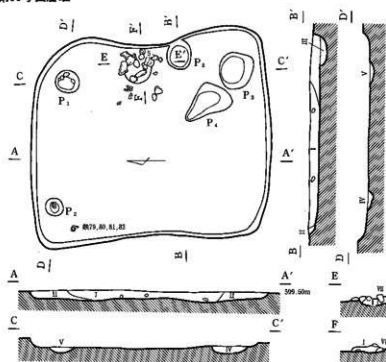
第3表 建物址一覧表

建物 No.	図 No.	平面形・柱配り	規模(cm)	柱間寸法(m)	主軸方向 面積(m <sup>2</sup> )	柱穴(cm)
2	8	長方形・側柱式	5間×1間 1200×240	桁行1.8～1.9 梁行2.4	N-4°-W 22.5	径：40～92 深さ：7～22

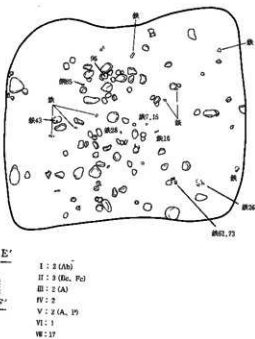
第4表 土坑一覧表

土坑 No.	図 No.	平面形	規模(cm)		備考
			長軸×短軸×深さ		
1101	8	台形	256×212×44		土師器・須恵器、黒色土器Aがみられる。 時期：古代5～6期
1102	8	円形	112×104×20		土師器・須恵器などが少量みられる。 時期不明。
1103	8	楕円形	76×68×8		流路にかかる。遺物はみられない。
1104	8	不明	108×(32)×8		95住に切られる。遺物はみられない。

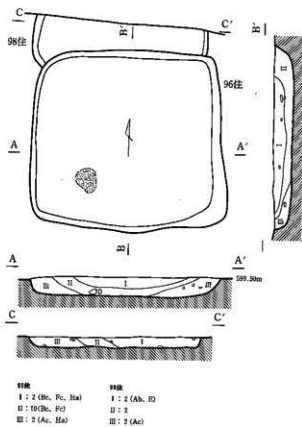
第95号住居址



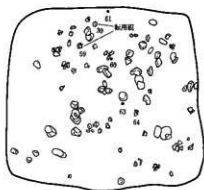
95住出土状況



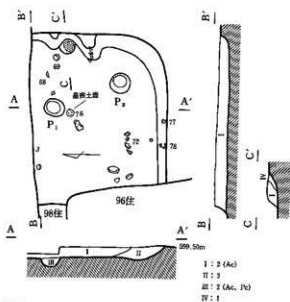
第96・98号住居址



96住出土状況

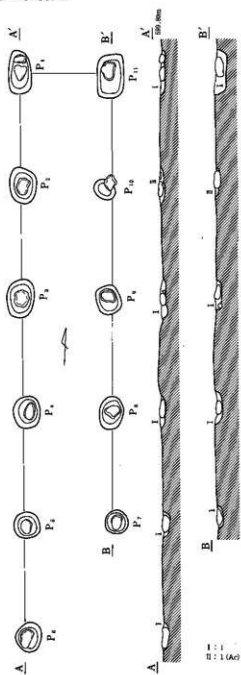


第97号住居址



第7図 遺構(1)

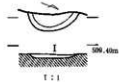
第2号建物址



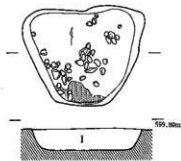
第1103号土坑



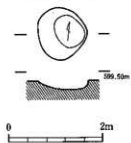
第1104号土坑



第1101号土坑



第1102号土坑



第8图 遺構(2)

### 3. 遺物

#### (1) 土器・陶器 (第9～12図、図版6～8)

本遺跡からは奈良・平安時代の土器・陶器を中心に、弥生時代の土器と近世～現代の陶磁器が出土している。このうち弥生時代の土器と近世～現代の陶磁器は少量だけ出土しているため、ここでは奈良・平安時代の土器・陶器を遺構毎・器種別に概観する。

総計93点図化した。このうち遺構に伴うもの88点、検出面から5点である。

**【95住】**：土師器、須恵器、黒色土器A、灰釉陶器がある。23点を図化した。用途別の割合は食器が9割を占める。残りは煮炊具（土師器羽釜）、貯蔵具（須恵器壺類、灰釉陶器壺類・瓶類）がみられる。

**土師器**：杯A（1～7）、椀（11）、鉢A（22）、羽釜A（23）。1～7は体部ロクロナデ調整、底部回転糸切り調整である。口径10.8～12.8cm（平均11.8cm）、器高2.7～3.7cm（平均3.2cm）。22は体部にロクロナデ調整が施される。口径20.9cm。23は口縁部下に鐮状の凸帯を貼り付け、凸帯は体部を一巡する。口径は18.2cm。外面と内面の口縁部にはヘラ状工具によるナデ調整、内面に粘土横積み上げ痕がみられる。

**須恵器**：図化していないが、壺の破片がみられる。

**黒色土器A**：内面を黒色処理したもの。杯A（8・9）、椀（10）。8・10とも体部ロクロ調整、底部回転糸切り調整である。

**灰釉陶器**：皿（19・20）、瓶類もしくは壺類（21）、椀もしくは皿の底部（12～18）。20は口縁部に輪花手法がみられる。高台の形態は三日月形高台（断面形は外側下半に稜をもち、内側は内湾するもの）が大半であるが、19の断面形は三角形を呈する。施釉法は14が刷毛塗り、19・20は漬け掛けである。21は高台のみ残存しており、外面ヘラ削り調整、内面ロクロナデ調整が施される。

**【96住】**：土師器、黒色土器A、黒色土器B、須恵器、軟質須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器がある。40点を図化した。用途別の割合は食器が9割を占め、残りは貯蔵具（須恵器壺・壺類、灰釉陶器壺・瓶類）である。

**土師器**：少量みられるが器種は不明である。

**黒色土器A**：杯A（24～34）、椀（36・37）、鉢A（42・43）。杯Aの口径は12.6～14.5cm（平均13.4cm）、器高は3.8～4.3cm（平均4.0cm）。底部はすべて回転糸切り調整であるが、27は底面外周部分をヘラ削り調整が施されている。35は高台を持たない皿。42は底面に手持ちヘラ削り痕がみられる。43は片口の付く鉢である。

**黒色土器B**：内面だけでなく外面にも黒色処理が施されたもの。皿B（41）、椀もしくは皿の底部（38・39・40）。41は扁平な体部に高台を付した皿。

**須恵器**：鉢A（46・47）、壺類もしくは壺類（48）。46・47は口縁部のみ残存している。双方とも折り返し口縁帯を持つ。48は平底を呈し、内外面ロクロナデ調整が施されている。

**軟質須恵器**：杯A（44・45）。軟質で黒斑を持つ須恵器の一種である。

**灰釉陶器**：椀（52・53・55・57）、皿（54・58）、壺類もしくは瓶類（49）、椀もしくは皿の底部（50・51・56・59）。施釉法は確認できる10個体のうち9個体（50～54・56～59）が漬け掛けに対し、55のみ刷毛塗りである。51・54は底部内面に重ね焼きの痕跡が残る。高台の形態は三日月形高台が多くみられるが、95住に比べ、内側が直線的である。49は底部のみ残存している。高台の付く形態である。

**緑釉陶器**：杯（61）、高台の破片（63）、器種不明の破片（60・62）。61は青灰色で硬質の胎土の杯である。内外面にはロクロ調整痕、底面には回転糸切り痕が明瞭に残る。淡緑色の釉薬は底部以外に施釉されているが剥落が著しい。63は青灰色で硬質の胎土、内外面にヘラ磨き調整が施される。また、底部内面には一



条の圏線がみられる。高台は内側が削られて段がつく形態の付け高台である。軸調は淡緑色を呈する。60・62は双方とも口縁部の破片である。60は硬質で灰白色の胎土、62は軟質で灰白色の胎土、双方とも内外面ヘラ磨き調整が施され、軸調は淡黄緑色を呈する。

【97住】：土師器、須恵器、黒色土器Aがある。18点図化した。用途別の割合は食器が6割、煮炊具が3割（土師器小型甕、長胴甕、甗）、貯蔵具1割（須恵器甕）である。

土師器：小型甕D（78・79）、甕B（82）、甗（80・81）。78・79は体部外面と口縁部内面にカキ目が施された小型甕である。82は長胴甕。体部外面に刷毛目、口縁部内面にカキ目、体部内面には指ナデ後にヘラ状工具による削りが施される。80は甗の底部の一部分（タガ）とおもわれる。81は口縁部のみ残存しており、外面に刷毛目が施される。80と81は同一個体の可能性がある。

須恵器：杯A（65～72）、杯B（73）、壺類（74）、盤（75）、甕（77）。杯Aの底部は回転糸切り調整が7点、回転ヘラ切りの手持ちヘラ削り1点（70）に分けられる。口径は11.2～13.4cm（平均12.5cm）、口径3.1～3.7cm（平均3.4cm）。75は体部が広く口縁部が短く立ち上がる形態の盤である。77は口縁部のみ残存している。頸部が外半する形態の甕である。

黒色土器A：杯A（76）。76は完形品である。口径17.4cm、器高5.3cm。底部に「池」と墨書されている。

【98住】：土師器、須恵器など少量みられるが器種は不明である。

【土1101】：土師器、須恵器、黒色土器Aがある。6点図化した。

土師器：杯A（83）、小型甕D（86）、甕B（88）。86は底部の糸切り痕は不明瞭である。

須恵器：杯A（84）、壺類（85）。85は高台の付く形態である。

黒色土器A：杯A（87）。口縁部のみ残存している。口径17cm。

【土1102】：土師器、須恵器など少量みられるが器種は不明である。

【検出面】：土師器、須恵器、黒色土器A、灰軸陶器がみられる。4点図化した。

土師器：少量みられるが器種は不明である。

須恵器：杯A（90・91）。底部が回転糸切り調整である。

黒色土器A：杯A（92・93）。92は口径13.2cm、器高4.1cm。93は口径17.0cm、器高5.4cm。

灰軸陶器：椀もしくは皿の底部（89）。三日月形の高台である。

## (2) 金属器（第13・14図、図版10）

総計87点出土した。内訳は鉄製品84点、銅製品3点である。このうち5点（20・22・78・86・87）以外の82点は95住から出土している。器種には釘、鏃、楔、刀子、不明品、銭貨がある。

釘：35点（1～35）出土している。完形品は2点（24・30）、頭部のみ残存するもの8点（10・15・23～25・27・30・35）、脚部のみ残存するもの11点（1～3・16・18～20・24・26・28・30）、両端が欠損するもの14点である（両端の欠損するものは断面方形の棒状品を釘とした）。

刀子：5点（36～40）出土している。37は身部と茎部の先端が欠損している。刃側に関を持ち、棟が直線的である。38と40は両端が欠損している。刃部と棟部は直線的であり、茎部は内側に湾曲している。39は刃部のみ残存している。

鏃：雁股鏃が1点（41）出土している。刃部の先端と茎部が欠損している。幅広い底部を呈し、側縁が直線的である。文献2の分類ではVIIb類に該当する。

楔：3点（42～44）出土している。

不明品：41点（45～85）出土している。形態は板状品、棒状品、不定形品に分けられる。85は銅製の板状品。筒状を呈する。79・80は断面が半円形を呈する不定形品。装飾品の一種だろうか。84は板を折り曲げ

て成形されており、箱状を呈する。図化していないが、内部に長軸方向とは垂直に棒状の部分がみられる。

・**銭貨**：2点(86・87)出土している。銭貨は隆平永宝(86)が1点、寛永通宝(87)が1点。いずれも検出面からの出土である。隆平永宝は皇朝十二銭のひとつで、初鑄年が796年(延暦15年)。松本市周辺では丘中学校南遺跡(塩尻市)で1点採集されているのみである。

### (3) 鍛冶関係資料(鑪の羽口：第12図93～96、鉄鉾滓：図版9)

鉄鉾滓と鑪の羽口が出土している。双方とも95住と96住にみられる。

**鉄鉾滓**：95住で158個(総重量：4694g、重量範囲：0.7～388g)、96住で7個(総重量：490g、重量範囲：7.3～214g)出土している。95住では鉄鉾滓は磁性を持つものと持たないものに分けられる。前者は重量範囲が0.8～71.6gと比較的軽く、球状を呈するものが大半である。一方、後者は重量範囲が0.7～388gと比較的重く、塊状、塊状を呈し、小石などの不純物が混入する。96住では塊状を呈する。磁性を持たず、不純物が混入する。

**鑪の羽口**：95住と96住で出土している(総重量：95住116g、96住70g)。このうち2点を図化した(94・95)。いずれも通風孔の径は不明である。94・95は炉側先端部の破片であり、溶滓の付着がある。95には通風孔に擦痕が残り、製作時に髴抜きされていることがわかる。

### (4) 文字関係資料(第9～12図、図版6～8)

墨書土器、陶硯、転用硯、窠書土器が出土している。内訳は墨書土器6点、陶硯1点、転用硯2点である。なお、墨書土器の底部内面に窠書がみられる。

**墨書土器**：検出面で1点(92)、96住で4点(50・56～58)、97住で1点(76)が出土している。50・56～58・92はいずれも灰軸陶器の高台・もしくは高台内に墨痕(50・56～58)が朱墨痕(92)を持つ。76は完形の黒色土器A杯の底部に「池」と墨書されている。

**陶硯**：96住で1点(64)出土している。器種は風字硯である。松本市周辺では三の宮遺跡(松本市)、吉田川西遺跡(塩尻市)でそれぞれ1点ずつ出土している。右側の手前部分が残存している。陸には墨痕と摩減痕がみられ、短脚は貼り付けられている。

**転用硯**：96住で2点(30・59)出土している。種類別では黒色土器A杯が1点(30)と灰軸陶器が1点(59)とに分けられる。30は完形の黒色土器A杯の内面一帯に朱墨痕がみられる。摩減痕がみられないので墨溜めとして使用されたものとおもわれる。59は底部のみ残存している。内面に薄い朱墨痕がみられる。また内面全面には摩減痕がみられ、かなり平滑である。硯として利用されたものとおもわれる。

**窠書土器**：灰軸陶器碗(57)の底部内面に十文字に窠書されている。

### (5) その他(第12図、図版9)

95住から凹石が1点(96)が出土している。多孔質安山岩製。長軸約136mm、短軸約111mm、重量約1810gを計る。もともとの素材が卵状礫と推定されるが、器面の現状が敲打痕及び研磨痕に覆われていることに加えて風化が進行していることから、製作工程については不詳である。(ア)卵状の礫選択→敲打・研磨もしくは、(イ)任意の礫選択→敲打・研磨による卵状形状ののちに、直径50mm、深さ約11mmを計るくぼみが敲打により形成されている。

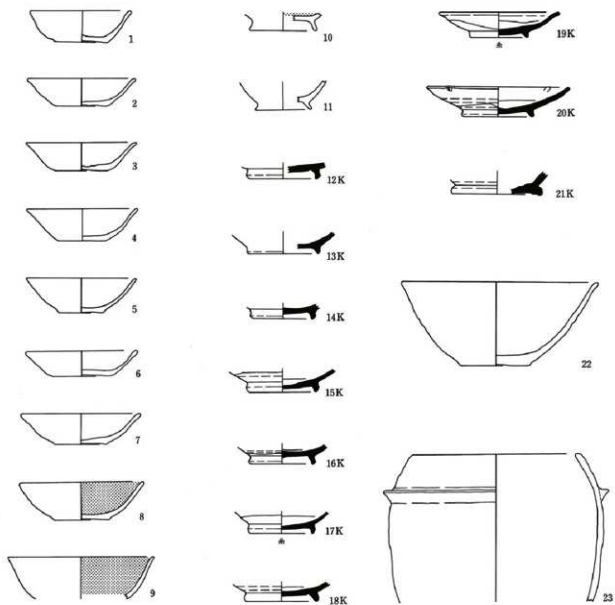
第5表 金属器一覽表

単位(長さ・幅・厚さ:cm、重量:g)、( )内は現存額

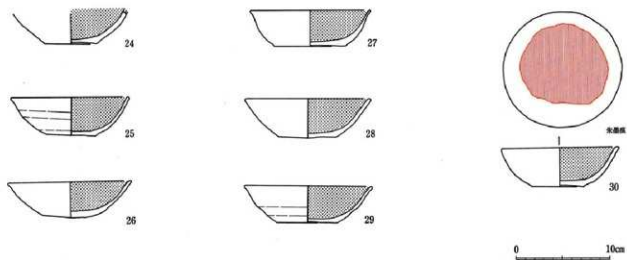
No.	器種	長さ	幅	厚さ	重量	備考	No.	器種	長さ	幅	厚さ	重量	備考
1	釘	(1.3)	(0.9)	(0.6)	(1.45)	両端欠。	46	不明	(3.1)	(1.5)	(0.2)	(1.15)	板状。
2	釘	(1.9)	(0.3)	(0.3)	(0.45)	頭部欠。	47	不明	(2.5)	(1.8)	(0.3)	(2.25)	板状。一部欠。
3	釘	(2.1)	(0.3)	(0.3)	(0.25)	頭部欠。	48	不明	(2.0)	(1.6)	(0.3)	(1.25)	板状。穿孔されている。
4	釘	(2.2)	(0.5)	(0.6)	(1.47)	両端欠。	49	不明	(2.7)	(2.1)	(0.3)	(4.10)	板状。
5	釘	(1.9)	(0.7)	(0.7)	(2.65)	両端欠。	50	不明	2.2	1.5	0.3	1.37	板状。
6	釘	(2.2)	(0.6)	(0.5)	(2.05)	両端欠。	51	不明	(4.2)	(2.5)	(0.1)	(4.15)	板状。
7	釘	(2.4)	(0.3)	(0.3)	(0.75)	両端欠。	52	不明	2.9	2.7	0.2	4.65	板状。穿孔されている。
8	釘	(2.7)	(0.3)	(0.3)	(0.90)	両端欠。	53	不明	1.9	0.6	0.2	0.50	棒状。断面方形。
9	釘	(2.1)	(0.6)	(0.4)	(1.15)	両端欠。	54	不明	2.2	0.7	0.5	0.80	棒状。断面方形。
10	釘	(2.3)	(0.6)	(0.3)	(4.50)	脚部欠。	55	不明	(2.1)	(0.6)	(0.6)	(1.53)	棒状。一部欠。
11	釘	(2.3)	(0.4)	(0.4)	(0.70)	両端欠。	56	不明	(1.7)	(0.5)	(0.2)	(0.50)	棒状。両端欠。
12	釘	(1.9)	(0.4)	(0.3)	(0.70)	両端欠。	57	不明	2.2	1.4	0.8	4.05	不定形。
13	釘	(3.2)	(0.4)	(0.3)	(0.70)	両端欠。	58	不明	2.0	2.2	0.9	6.15	不定形。
14	釘	(3.1)	(0.5)	(0.6)	(2.00)	両端欠。	59	不明	2.7	2.1	0.4	4.00	不定形。
15	釘	(2.1)	(0.5)	(0.5)	(2.65)	脚部欠。頭部曲がる。	60	不明	3.6	2.4	0.5	11.65	不定形。
16	釘	(2.7)	(0.5)	(0.5)	(1.42)	頭部欠。	61	不明	2.9	1.5	0.6	3.62	不定形。
17	釘	(2.9)	(0.6)	(0.5)	(2.55)	両端欠。	62	不明	(2.4)	(1.3)	(0.5)	(1.65)	不定形。両端欠。断面方形。
18	釘	(3.6)	(0.6)	(0.6)	(3.15)	頭部欠。	63	不明	2.9	0.5	0.4	2.20	棒状。
19	釘	(3.5)	(0.4)	(0.3)	(1.35)	頭部欠。	64	不明	(2.7)	(0.9)	(0.3)	(1.15)	不定形。
20	釘	(3.9)	(0.5)	(0.4)	(1.75)	頭部欠。96住出土。	65	不明	(2.6)	(0.6)	(0.2)	(0.65)	棒状。両端欠。
21	釘	(3.2)	(0.6)	(0.4)	(1.67)	両端欠。	66	不明	(2.5)	(0.5)	(0.2)	(0.60)	棒状。両端欠。断面方形。
22	釘	(4.3)	(0.7)	(0.7)	(4.75)	両端欠。96住出土。	67	不明	3.0	0.7	0.3	1.35	不定形。断面半円形。
23	釘	(4.2)	(0.7)	(0.7)	(5.60)	両端欠。頭部曲がる。	68	不明	4.0	0.8	0.9	9.47	棒状。断面円形。
24	釘	4.6	0.6	0.5	3.30	完形品。やや湾曲する。	69	不明	4.2	1.1	0.6	6.70	不定形。断面方形。
25	釘	(4.8)	(0.5)	(0.5)	(2.08)	脚部が曲がる。	70	不明	(3.5)	(1.0)	(0.8)	(8.50)	棒状。両端欠。
26	釘	(4.9)	(0.7)	(0.6)	(3.75)	脚部欠。	71	不明	3.5	0.4	0.3	0.75	棒状。
27	釘	(5.3)	(0.5)	(0.5)	(2.55)	脚部欠。ほぼ完形。	72	不明	(3.6)	(0.4)	(0.2)	(0.70)	棒状。両端欠。
28	釘	(4.9)	(0.4)	(0.6)	(3.42)	頭部欠。	73	不明	(4.0)	(0.5)	(0.2)	(0.95)	棒状。
29	釘	(6.0)	(0.5)	(0.4)	(3.15)	両端欠。	74	不明	(4.7)	(0.5)	(0.2)	(1.00)	棒状。両端欠。
30	釘	7.0	0.5	0.4	4.01	完形品。頭部曲がる。	75	不明	(4.7)	(0.5)	(0.3)	(1.85)	棒状。両端欠。
31	釘	(5.2)	(0.9)	(0.7)	(5.70)	両端欠。	76	不明	(4.7)	(0.4)	(0.3)	(0.55)	棒状。両端欠。
32	釘	(5.2)	(0.6)	(0.6)	(3.55)	両端欠。やや湾曲する。	77	不明	5.8	1.2	0.6	10.50	不定形。
33	釘	(8.0)	(0.6)	(0.4)	(3.85)	両端欠。1端曲がる。	78	不明	5.7	1.5	0.9	16.60	不定形。96住出土。
34	釘	(10.8)	(0.8)	(0.6)	(3.70)	両端欠。1端が板状を呈する。	79	不明	(9.0)	(6.8)	(0.5)	(38.95)	不定形。上端欠。断面半円形。
35	釘	(8.1)	(0.9)	(0.9)	(13.50)	脚部欠。頭部曲がる。	80	不明	(8.0)	(6.2)	(0.5)	(35.10)	不定形。両端欠。断面半円形。
36	刀子	(4.5)	(0.8)	(0.5)	(4.10)	刃部、茎部欠。	81	不明	(5.5)	(0.9)	(0.3)	(5.50)	不定形。両端欠。断面半円形。
37	刀子	(5.2)	(1.0)	(0.3)	(2.10)	刃部、茎部欠。	82	不明	(3.5)	(0.7)	(0.3)	(4.2)	不定形。両端欠。
38	刀子	(4.9)	(1.0)	(0.3)	(3.55)	刃部、茎部欠。	83	不明	(5.0)	(1.1)	(0.6)	(11.35)	不定形。上端欠。先端尖る。
39	刀子	(3.2)	(0.8)	(0.2)	(0.80)	刃部、茎部欠。	84	不明	5.1	1.4	1.6	21.45	箱状。板を折り曲げて成型。
40	刀子	(8.4)	(1.1)	(0.4)	(10.35)	刃部、茎部欠。	85	不明	(5.1)	(0.6)	(0.1)	(1.65)	筒状。銅製品。両端欠。
41	鏃	(5.8)	(4.2)	(0.4)	(18.45)	鏃部、茎部欠。	86	鍍貨	2.4	2.4	0.1	1.35	扁平永宝。検出面出土。
42	鏃	(5.5)	(1.2)	(1.3)	(14.85)	一部欠。先端が尖る。	87	鍍貨	2.4	2.4	0.1	3.03	扁平永宝。検出面出土。
43	鏃	(4.5)	(1.3)	(0.6)	(11.50)	完形品。先端が尖る。頭部欠。							
44	鏃	(4.0)	(1.0)	(0.9)	(10.70)	一部欠。先端が尖る。							
45	不明	2.9	1.4	0.3	1.25	板状。							

注: 20・22・78・86・87以外はすべて96住から出土している。

95住 (1~23)

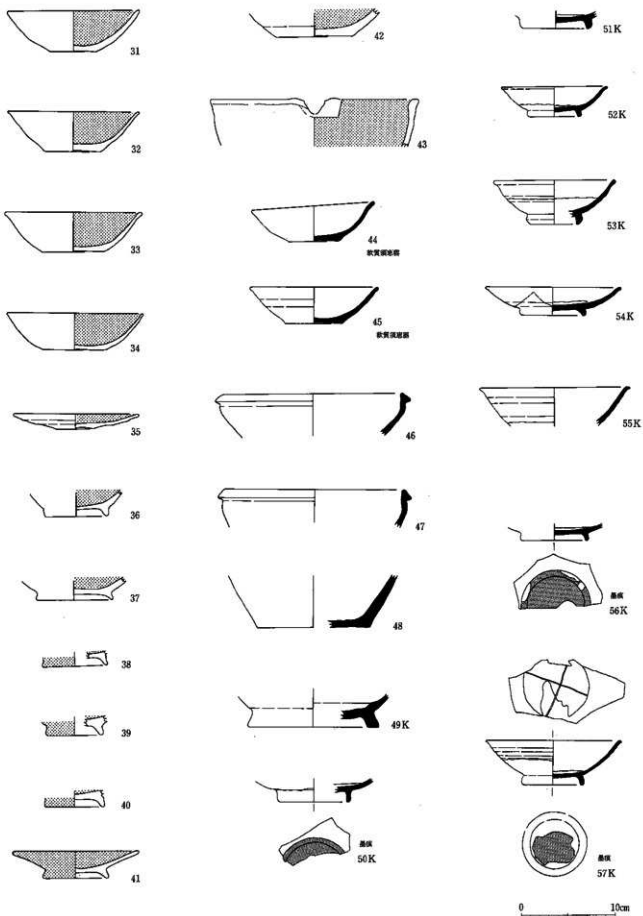


96住 (24~30)



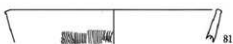
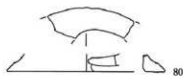
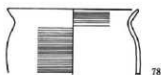
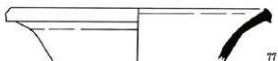
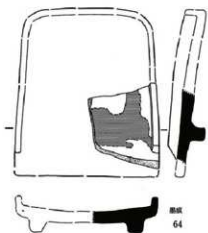
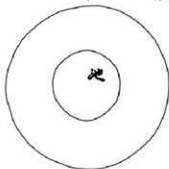
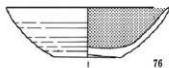
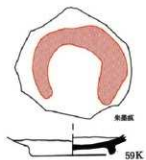
第9図 遺物(1)

98住 (31~57)



第10図 遺物(2)

96住 (58~64)



97住 (65~82)



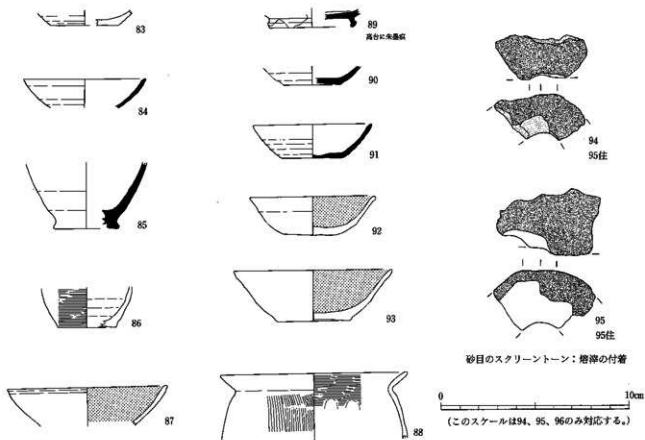
0 10cm

第11圖 遺物(3)

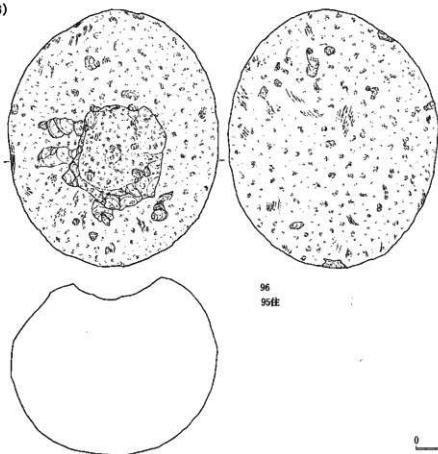
土1101 (83~88)

検出面 (89~93)

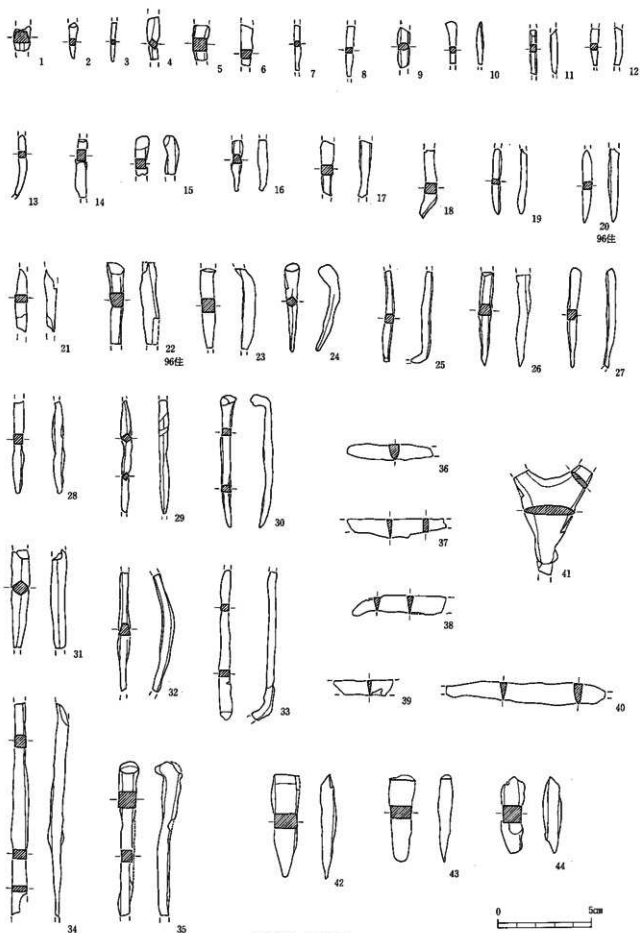
土製品 (94、95)



石器 (96)

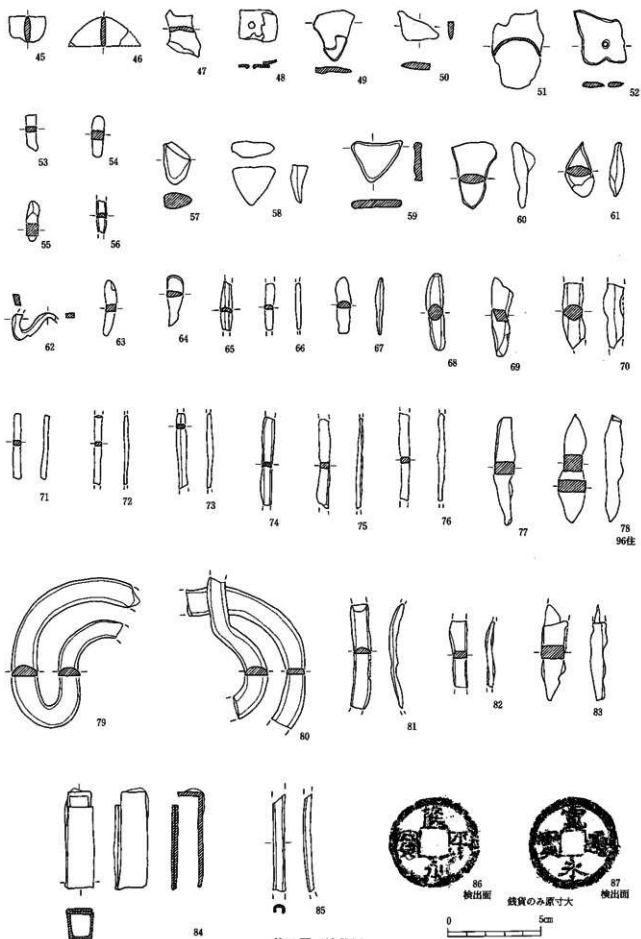


第12図 遺物 (4)



第13图 遗物(5)





第14図 遺物(6)

## IV. 調査のまとめ

県町遺跡は弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代にわたり居住のなされた集落であるが、今次の調査ではこのうち奈良・平安時代の遺構が検出された。過去の調査より本遺跡の存続期間は8世紀後半から11世紀代（特に9世紀後半～末）であったが、時期の確定できる3軒の住居址（95～97住）と土坑1101もこの期間内にあたる。該期の集落が北側にも分布することが確認された。調査地の大半は東西方向に走る自然流路址が占め、遺構は北西部分に集中している。96住、97住、98住が切り合い関係にあることは地形的要因によっても居住する空間が限定されたこと示しているのではないだろうか。調査地での遺構の配置や北側に尾根状の地形がみられることから、本遺跡の該期の集落はさらに北側へ広がるものと予想される。

今次調査では遺構が比較的少ないが、緑釉陶器、陶硯、転用硯、隆平永宝などの特殊品や大量の金属器、鉄鋳滓の検出が注目される事柄である。

緑釉陶器は過去の調査でも数多く検出されているが、今次調査でも総計5点検出された。すべて96住から出土している。緑釉陶器のような貴重品は身分秩序を反映すると考えられ、本遺跡の周辺集落に対する優位がうかがえる。

陶硯と転用硯は96住で出土している。陶硯は本遺跡では初めての出土であり、周辺では岡田町遺跡（円面硯、把手付硯）、宮の前遺跡（円面硯）、塩辛遺跡（円面硯、把手付硯）、大輔原遺跡（円面硯、把手付硯）などがみられるものの、風字硯の出土は松本市内及び周辺地域では三の宮遺跡、吉田川西遺跡に次いで3例目である。本書では墨書土器とした墨痕、朱墨痕のみられる灰釉陶器はパレットとして利用されたとおもわれ、転用硯の一種であるともいえる。これを含めれば転用硯は合計で7点出土している。使用部位（付着部位）は高台内が4点、高台が1点、底部内面が2点に分けられる。黒色土器A杯（30）は完形品であるが、残りは全て灰釉陶器の破片が利用されている。内面に摩擦痕のある灰釉陶器（59）は故意に打ち欠いてつくられており、96住出土の灰釉陶器が底径6.5cm前後のところ底径9.2cmを計る。硯として使用し易い破片を選択したのだろう。

これら陶硯と転用硯の存在は集落内での識字層、文字を筆写する層、文書作成事務に係わる層の存在が予想される。転用硯のなかで朱墨の付着したものは3点みられた。朱墨は税を納入する際や帳簿を点検する際にチェックする役割を持っていたと考えられている。本遺跡ではこれまでも12点の朱墨痕のある転用硯が出土しており、本遺跡が官衙的な機能をもっていたことが予想される。

金属器、鉄鋳滓、鞘の羽口は95住、96住及び検出面でみられる。総計で金属器が87点、鉄鋳滓が165点（5184g）、鞘の羽口が186g出土している。特に95住には82点の金属器と4694gの鉄鋳滓及び116gの羽口が検出されており、金属器と鉄鋳滓の量は本遺跡の該期の単一遺構からの出土量としては最多である。出土した金属器の構成は釘、刀子、鏃、不明品、楔、銅製品である。このうち釘と不明品が大半を占める。不明品の形態は板状、棒状、不定形を呈する。これらは用途不明品や鍛錬鍛冶などで排出される未製品、半端品などと考えられる。79・80・84などは用途不明品であり他に類例を見ないものである。

95住、96住の出土遺物は鍛錬鍛冶（小鍛冶）がおこなわれたことを示唆している。しかし、出土状況からすべて人為的投棄とおもわれ、住居内に作業した施設（鍛冶炉、鉄床、作業ビットなど）もみられないので、本址周辺に作業施設が存在したものとおもわれる。本遺跡のこれまでの調査で鍛錬鍛冶の存在を示唆する遺物（金属器、鉄鋳滓、羽口、砥石など）の検出された該期の遺構は18軒の住居址、5基の土坑及びビット、4基の集石などがあるが、すべてが投棄と考えられる出土状況であり、直接作業をおこなったと考えられる遺構は検出されていない。

隆平永宝は検出面から1点出土した。本遺跡での皇朝十二銭の出土は初めてである。これは中央との交流を物語るものである。初鋳年は796年(延暦15年)11月であり、平安京に遷都されて初めて鑄造された銭貨である。松本市内及び周辺地域では丘中学校南遺跡(塩尻市)で1点採集されているのみである。

## 歴史背景

現在の松本市域は律令体制下の行政単位では筑摩郡にあたる。筑摩郡下には10世紀初めに編纂された『和名類聚抄』によると良田、崇賀、辛犬、錦服、山家、大井の6郷が存在したと記されている。このうち「山家郷」の名は正倉院宝物の白布墨書銘、平安京出土の木簡(文献5参照)などにみられ、薄川流域の両岸、現在の里山辺、入山辺、筑摩、泉、埋橋、神田、三才あたりに比定されており、本遺跡は山家郷内にあたる。

山家郷に比定される薄川流域の該期集落には本遺跡のほかに下原遺跡(7世紀後半～8世紀前半、11世紀)、石上遺跡・薄町遺跡(9世紀後半～10世紀初頭、12世紀初め)、林山腰遺跡(9世紀)、堀の内遺跡(9世紀、11世紀後半)、針塚遺跡(8世紀中頃～9世紀中頃、11世紀～12世紀後半)、千鹿頭北遺跡(8世紀後半、11世紀)、神田遺跡(8世紀～10世紀)などがある。堀の内遺跡で住居址67軒、下原遺跡では竪穴住居址のほかに掘立柱建物址が10棟、針塚遺跡で輸入陶磁器、石上遺跡では県内でも屈指の土壌墓1基などが検出されている。

これらの集落は該期の全期間にわたって存続したわけではなく、それぞれ断続的に、また単期間存続した。本遺跡は最盛期である9世紀後半から同末期において緑釉陶器を多数保有し、陶硯や転用硯、皇朝十二銭のひとつ隆平永宝などがみられることから当地域の中核的集落と位置づけられる。この時期から10世紀にかけて松本平の集落立地は大きな画期を迎える。8世紀から継続してきたムラが消滅し、継続しているムラの内部でも建物の数が減少し、周辺地域への新しい集落の展開と一定の範囲内に急速に力を蓄えるムラが存在する。本遺跡はこの変化の中で力を蓄えたムラのひとつであったとおもわれる。

その後11世紀まで本遺跡は存続していくが、当地域では針塚遺跡、堀の内遺跡、石上遺跡、薄町遺跡などに中心が移っていくようである。文献4の第11章で指摘されているように弥生時代から平安時代にかけて比較的安定していたとおもわれる本遺跡周辺も中世以降は薄川の氾濫などにより居住に適さない土地になったのだろう。今次調査の検出面でみられる該期以降の遺物及び遺構は近世以降まで下ることもそれを示している。

## 参考文献

文献1～4

松本市 1996 「松本市史 第2巻 歴史編Ⅰ 原始古代中世」一文獻5

## 图版

---

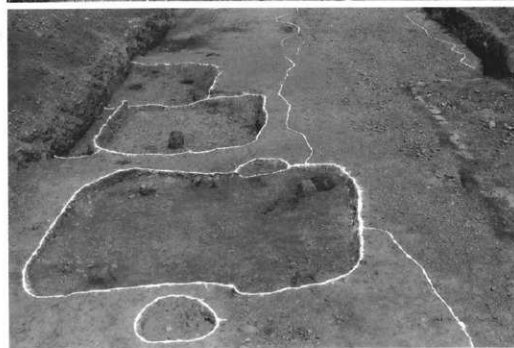
全景  
南西から

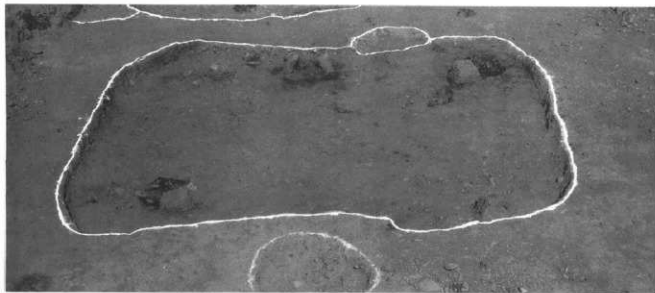


全景  
東から

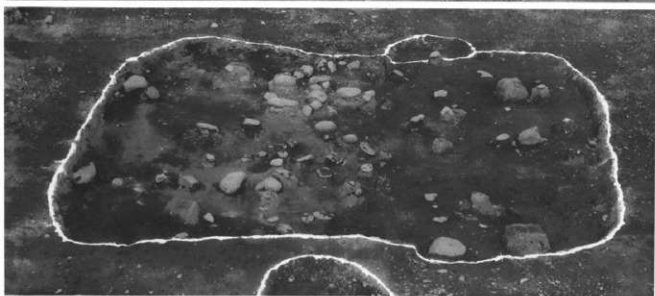


全景  
西から





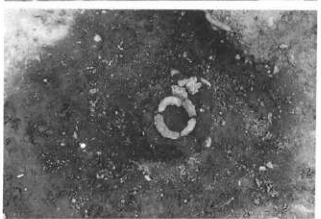
95住  
完掘  
(西から)



95住  
遺物出土状況  
(西から)

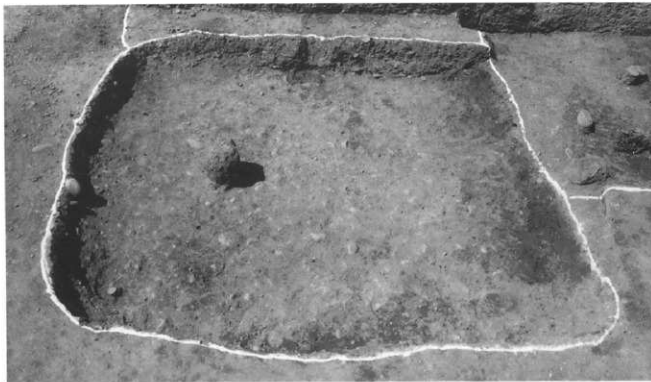


95住  
カマド  
左：完掘  
右：出土状況



95住  
遺物出土状況  
左：土師器 杯(5)  
右：金属器  
(79,80,81,82)

96住  
完掘  
(南から)



96住  
遺物出土状況  
(南から)



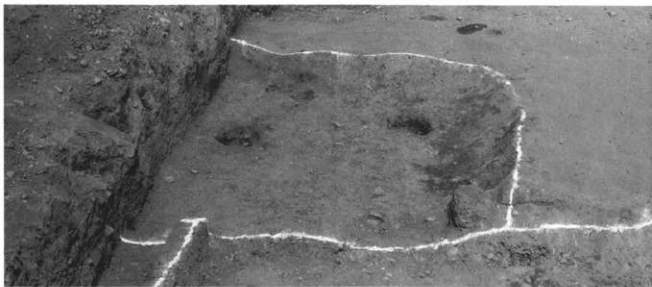
96住  
遺物出土状況  
右：黒色土器A杯  
(30)

左：南から

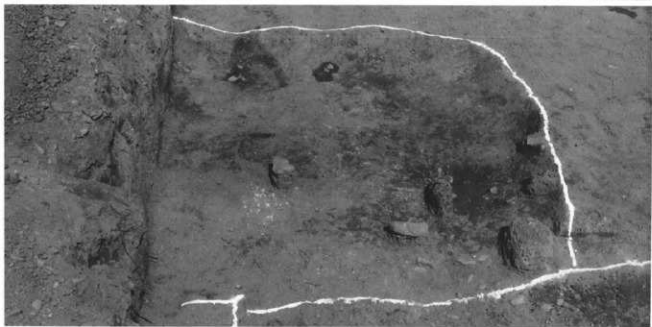


96住  
遺物出土状況  
右：陶硯  
(風字硯64)  
左：緑釉陶器  
(63)





97住  
完掘  
(西から)



97住  
遺物出土状況  
(西から)



97住  
カマド  
完掘



97住  
遺物出土状況  
左：須恵器 杯(69)  
右：黒色土器A杯(76)



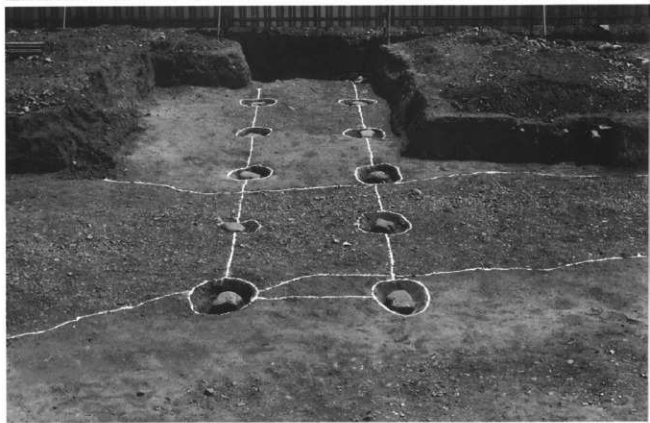
検出面  
遺物出土状況  
黒色土器A杯  
(93)



土1101  
遺物出土状況  
(南から)



建2  
完掘  
(北から)





1



8



2



9



3



19



4



20



5



22



6



23

95住出土遺物  
土師器杯  
1・2・3  
4・5・6  
黑色土器A杯  
8・9  
灰釉陶器  
19・20  
土師器鉢  
22  
土師器羽釜  
23

96 住出土遺物

黑色土器 A 杯

24 · 25 · 26

29 · 30 · 31

32

黑色土器 B 皿

41

軟質須惠器杯

44 · 45

灰釉陶器碗

52 · 53

灰釉陶器皿

54



24



32



25



41



26



44



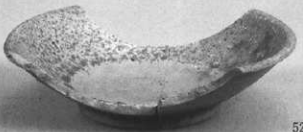
29



45



30



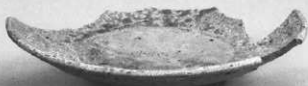
52



31



53



54



57



58



59



49



61



63



68



69



72



75



76



92



93



89

96住・97住  
土1101・検出面  
出土遺物

灰釉陶器

57・58・59

49・89

緑釉陶器

61・63

須恵器杯

68・69・72

須恵器盤

75

黒色土器A杯

76・92・93

陶器  
(風字段64)

左：表  
右：裏



64



64

石器(凹石96)  
(95住出土)



96

鉄鉱滓  
(95住出土)



金属器  
 釘 24・27・30・35  
 刀子 36・37・38  
 39・40  
 鏃 41  
 楔 43  
 不明品  
 51・52・60・61  
 62・78・79・80  
 84・85  
 銭貨 86



79・80は1：2。それ以外は原寸大。

県町遺跡緊急発掘調査報告書抄録

ふりがな	あがたまちいせききんきゅうはくつちょうさほうこくしょ							
書名	県町遺跡XI緊急発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	松本市文化財調査報告							
シリーズ番号	No.128							
編著者名	荒木 龍、太田圭郁							
編集機関	松本市教育委員会（松本市立考古博物館）							
所在地	〒390 松本市丸の内3番7号（松本市中山3738-1・TEL0263-86-4710）							
発行年月日	平成9（1997）年3月31日（平成8年度）							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
あがたまち 県 町	ながの けんまつもとし 長野県松本市 あがたまち 県	20202	161	36度 13分 40秒	139度 59分 00秒	19960422～ 19960514	662.4m <sup>2</sup>	大蔵省関東 財務局公務 員宿舍建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
県町	集落跡	奈良・平安	竪穴住居址 4軒 建物址 1軒 土坑 4基	土器・陶器（土師器・ 須恵器・灰釉陶器・緑 釉陶器） 金属器（釘・刀子・鎌・ 楔・不明品・銭貨他） 土製品（羽口） 石器（凹石）		奈良・平安時代にわたる集 落遺跡の調査。 95住では本遺跡中、最少量 の鉄鉱滓の出土。96住では 陶硯（風字硯）と転用硯な どの文字資料、検出面から 隆平永宝（銭貨）といった 特殊品が出土した。		

松本市文化財調査報告 No.128

松本市県町遺跡XI

— 緊急発掘調査報告書 —

発行日 平成9年3月31日

発行者 松本市教育委員会

〒390 長野県松本市丸の内3番7号

印刷 株式会社 藤原印刷

